



一九六〇年代後半から七〇年代は、知的教育をめぐるさまざまなプログラムが幼児教育に導入された時代であった。行動主義の心理学と教育学の考え方が教育界を蔽っていたころ、更にそれ以前の時期から、ヨーロッパでは、自然科学の方法論ではない、独自の精神科学に基づいた教育学の流れがあった。ランゲフェルト、ボルノウらは、この時代を通じて、その主張を貫いていた。これ

カナダ・アメリカの旅 2

保育の理論と実践を求めて

津守 真

らの人々は、それぞれ独自の学風を形成していたが、ひとつの学会や組織をつくることをしなかった。その考え方の根底自体が、外的規準やドグマに従うのではなく、子どもと大人、人間相互の内的理解を深めてゆくことにあるから、組織に依存することへの抵抗感があったのではないかと思う。それにもかかわらず、これらの学風の中で育った人たちが、今回、カナダのエドモントンで四

回目の会合をした。オランダやドイツから中堅の学者が集まり、アメリカのいくつかの大学、及び、カナダ全土から参加者があり、百人足らずの、互いに知り合うのに丁度よいサイズの集まりであった。個人の発言も一人四十分ずつ与えられるので、かなり十分に話すことができ。しかも、自分だけが最先端の抜きん出た研究を発表しようとするのではなく、人間に共通の課題について、互いに考えていることの理解を深めようとする態度が、落着いた雰囲気をつくり出していった。その会合での収穫を心の中に温めながら、五日間の会合を終えて、翌朝の早い飛行機でシカゴに向った。

シカゴ

青い空に夏の太陽の輝やくひろびろとしたカナダから、シカゴのダウンタウンのホテルに着いたとき、ホテルそのものは立派なのだが、埃をかぶったような古い煉瓦の建物の街並み、忙しく事務的な人々の対応に、現代の都市の緊張を覚えた。私共がシカゴに立寄ったのは、

ベッテルハイムの障害児の学校を訪問したとかねがね思っていたからである。「うつろな砦」（みすず書房）「愛だけでは十分ではない」（誠信書房）など、ベッテルハイムの著書は実践の問題と深くかかわっている。ことに、*A Home for Heart* には、彼の学校の運営の仕方及び、具体的なことに当たっての彼の哲学が記されていて、現在の私には、参考になることが多かった。ベッテルハイムはすでに八十歳をこえており、十年前に隠退してここにはおられないことは分っていたが、あらかじめ、現在の校長のジャキイ・サンダースに手紙で訪問の約束をしておいたのである。

ダウンタウンから、バスで、ステートストリートを直ぐ南に五十五番街ガフィールドで乗換える。その間約三十分間、広い道路の両側は、古い煉瓦やコンクリートの建物で、半分壊れたり、窓ガラスが破れたりしているものが多い。二十世紀の前半までは繁栄していたのであろう倉庫やビルの立ち並んだ街路には、人影も見えず、荒涼とした印象を受ける。丁度五月二十七日は米国

のメモリアルデーのせいもあつたのかもしれないが、バスは数人の黒人と私共だけで、座席は布も張っていない板張りで、窓枠が風にあおられて首を立てた。バスを乗換えて間もなくシカゴ大学のキャンパスにはいる。緑の芝生は広く、その間にまばらに立つ建物はひとつひとつ立派である。キャンパスの外縁をなす帯のように広い芝生から、幅広い道路を隔てて、大きめの個人の家のような建物が立ち並ぶ。シカゴ大学付属ソニア、シャンクマン、オーソジュエニックススクールは、その中のひとつである。そこからシカゴ大学を眺めると、ゴシック風の古典的な大学の建物の集まりが偉観である。さすがに歴史的に意義のあるこの大学が、現代都市シカゴの変貌の中を、どっしりと生きのびていることを感じさせられる。

私共を待っていてくれた若い女性のスタッフが、玄関わきの応接室に案内してくれた。部屋の隅にはミニハウスがあり、棚の上には飾り物などが並べてある。ここが入学希望者と最初に面接する部分である。子どもが最初に学校の中を全部見てまわって、両者がそれでよいと思

えば入学することになる。その出発点はこの応接室である。この学校は障害児の学校で寄宿舎がついている。ベッテルハイムのいたころには、六歳から二十六歳と年齢の幅があつたが、現在は十六歳から二十五歳と変化してきているという。障害児の学校は高年齢化する傾向があるが、その理由だけではなく、学校の性格が変化してきているように思えた。社会や制度の変化は、ひとつの学校の性格をかえてゆくのだろう。愛育養護学校は、二歳位から十三、四歳で、すべて家庭からの通学だから、学校の性格としてはこことは非常に違っている。しかし、学校が子どもを選択するのではなく、子どもが学校を選び、その子どもが快く過せるように環境をつくるという考え方においては共通である。

生徒たちは昼間は教室にいており、その留守に建物の内部を案内してもらった。かなり広い居室の壁際に、五つほどベッドがおいてある。枕元の壁には、それぞれ好きなシールなどが貼ってあり、ぬいぐるみがふとんにいれてある。中央に低いテーブルがあり、一緒に集まる

こともできる。入口に近いところの壁に、鍵のかかるドアのついた戸棚があり、その中には薬品などが入っている。廊下にはキッチンと言って、鍵でドアをあけると壁面に流しとガス台があらわれる。迷路のように階段を昇ったり降りたり、ドアを開けたり閉めたりして、同じような部屋をいくつも案内してもらおう。上階には昔のチャペルを改造した集会室がある。ベッテルハイムの書物によれば、障書児の学校には、魂に安らぎを与える空間が必要であり、改造のときにチャペルを保存することにしたのだという。もうひとつの集会室からは中庭に出ることができる。寒い気候の地方でもあり、石造りの頑丈な建物は外界から隔絶するかのようである。日本の幼稚園や私共の学校のように外に向って開かれた明るさには欠けるように思えた。このことは、私共とは比較にならないほどの、この学校の負っている生活の重さにもよるのだと思う。知能の遅れはひどくないけれども、親から拒否され、精神的重荷を負っているのがこの子どもたちである。建物の中を案内してもらってから、この学校に

長く勤めているという女性のソーシャルワーカーが、私共のために一時間以上も時間をさいて、スタッフがミーティングの部屋でいろいろと話してくれた。この部屋で、もう何十年間も毎日ミーティングが行われているという。ベッテルハイムの著書にあらわれる彼とスタッフとの間のきめこまかな、ときには厳しい対話はここで行われてきた。昨年、ベッテルハイムはこの学校を訪れたが、彼がいたころの子どもたちはすでに去り、スタッフも半分以上いれかわっていて、自分たち古いスタッフは寂しい思いをしたとこの人は語ってくれた。

帰りがけに玄関に向う階段は、一見あたりまえの階段であるが、子どもにとっては、その一段一段が、天国へ導びくものであったり、地獄へと墜落する思いを抱かせるとベッテルハイムは書いている。その階段の両側の壁には、天地創造の混沌の有様や、天空の銀河、人間の労働などが描かれており、踊り場には、神話の動物、ユニコーンとフェニックスが描かれている。真の愛に出会ったときに自らの意志によって自己を放棄する一角獣ユニ

コーンと、自分の身体を焼かれた灰の中から再生する不死鳥フェニックスである。これは、自由意志によって以前の存在を脱ぎすて、よりよい新しい存在を獲得するこの学校のシンボルである。

ベッテルハイムは、ユダヤ系ドイツ人であり、第二次世界大戦のとき、アウシュヴィツの収容所から奇蹟的に脱出し、一九三九年、アメリカに移住した。この学校は亡命の学者にふさわしい場所であったのかもしれない。

彼の症例報告に出てくるローリーが、乾ぶどうを自分の指で一粒ずつつまんで口にいれる。そのベッドの傍に夜ごと、何時間も一緒に腰かけて遊ぶこの人の姿が目につく。現在は、この同じベッドの傍で、他の若い研究者が同じように時を過しているのだろう。訓練や教育のプログラムの実施ではない、ひとりの子どもと心を通い合わせる孤独な実践は、ことごとくは文字になり得ない。この学校から受ける重苦しい印象は、社会から受けいられないこの子どもたちの生の重さなのか、それを日々負うスタッフたちの重さなのか、このような子ども

もたちを生み出す社会の重さの故か。この学校のスタッフたちに尊敬の念を抱きつつ辞した。学校の性格は幼稚園とは異なるが、ひとりひとりの子どもの内心の要求にこたえなければ一日として過せない点において、すべての教育の原点を指し示しているのだと思う。帰路のタクシーでグリーンベルトの間のハイウェイを、忽ちに、この都市の荒廃部分を見ることがもなく、ダウンタウンに到着した。

倉橋惣三の『幼稚園雑草』には、シカゴ大学付属幼稚園訪問記がある。それは今世紀のはじめの繁栄の頂点にあったシカゴである。

ミネアポリス

カナダ、アメリカにいくと、私はいつもミネアポリスに立寄らないではいられない。ここは三十数年前に二年間勉強していた土地で、故郷に帰ったような気がする。かつてお世話になっていた家の、二階の同じ部分に泊り、老齢になられたが、今なお元気に私共を迎えて下さ

るN氏夫妻と朝食を共にすると、長い年月はなかったかのように感じてしまう。到着して翌日は、大勢の友人が寄ってくれた。今回は四度目であるが、妻と一緒に来たのは初めてなので格別である。

N氏の家に私が住んでいたころ、私によく馴ついて、私と一緒になければベッドに寝にいかないといつて泣いた三歳のメアリアンは、十年以上に前に結婚して、前回の訪問のときには一歳半の子どもがいた。私が床の上に坐りこんで遊んでいると、自分が小さいときと同じようだといつて笑った。このメアリアンが、今回は四人の子どもをつれてあらわれた。一番下の女の子が小学校四年生で、上の子ども三人が小学校六年生だという。三人同年齢とはどうしてかと驚くと、そのうち二人は韓国の戦争孤児を養子にしたのだという。四人の子どもたちは、小犬のように走りこんできて、見るからに快活で幸せそう、この一家と共に過した時間は、今回の私共の旅行で、最も楽しいときだった。メアリアンは小柄な身体にエネルギーを漲らせて、ひとりひとりの子どもに心を配

って世話をしていた。韓国から引取ったのは五歳の時であるが、アメリカに着いたときには英語もしゃべれず、居間の椅子に腰かけて身動きもしないで、予め送られていたその家の写真と実物とを見比べていたという。本当にこれが実在する現実なのかと自らの中に確かめていたのだろう。数日後には学校に通いはじめ、家族の一員として、また社会からも温かく迎え入れられていることを感じてから、たちまち他の子どもと同じようになってた。N氏夫妻は私共に話してくれた。N氏夫妻には実子がなく、メアリアン自身も、三歳のときにこの家に養女として来たのである。それにしても、他国の孤児を養子にする度量には感心する。この日は丁度そのうちのひとりの子どもの誕生日で、N氏夫人は誕生祝にとキムチの瓶詰を買ってきた。大人も子どももすべてを承知の上で、親子関係を形成している。子どもを期間を大人が預かって、必要としている物質と精神を与えようという考えである。私共が帰るとき、この子どもたちは、首ながみついてキスして、大きくなって韓国に帰る途中、私

共の家に立寄るからといった。

ミネアポリスに滞在中に、私は大学時代の一人の友人が、今回は会えないが、と電話をかけてきた。彼女も四人の子どもがいるという。最年少が二十三歳で、最年長が二十八歳とのことで、たずねると、そのうち二人は東南アジアの子どもを引取ったのだという。西洋では十八歳をこえると、親の家に留まることは少ないから、この人たちはそれぞれに自分の道を歩みはじめているのだろう。電話口で屈託なく笑う声は、大学時代とかわらず明るかった。

家庭のみでなく、幼稚園・学校が、異文化から来た子どもたちを快く受け入れるのでなければ、彼らは新しい土地で自らを伸ばしてゆくことはできないだろう。この点で社会と学校とは切り離すことができない。学校が競争原理に立って能力に重点をおくかぎり、異文化からの子どもたちはハンディキャップを負うことになる。異った者同士が互いに理解を深めつつひとつの社会を形成する場所が学校であると考えれば、それはデモクラシーの

価値を個人の中に実現する場となるであろう。三十年前に私がこの市にいたころ、アメリカ中西部のこの都市は、黒人、アジア人、インディアンなど異人種のことを考える人間関係委員会を市長の諮問機関として持つており、この点で進歩的な市と考えられていた。私がお世話になった北川台輔先生は、その委員会のチェアマンをしておられたし、T夫人も委員のひとりであった。それから現在までの間に、西欧の各国は、移民や難民を多数引き受けることとなり、世界情勢も加わって、白人社会は、異民族を加えて多様な社会を当然と考えるようになった。学校もまた、その子どもたちの異質性を尊重しつつ、ひとつの社会を形成することを大きな課題とした。日本は単一言語、単一族の問題はないと考える人もいるが、歴史的にそうであるに違いないけれども、異質な者を選択し排除した上で、同質な者の利益を保護しているのであって、その故に世界の人々の眼からは利己主義と見られるのである。この点で白人社会はこの三十年間の努力の末に、異質なものをそのままに受入れる社会へ

の変貌を遂げたのだと思う。

ミネアポリスの滞在は、四日間という短い期間だったが、一晚、友人のS氏の高校生の子どもの卒業レセプションに連れていってもらった。四人のきょうだいの末子であるこの子どもは、ピアノが好きで、高校の講堂で行われたこのレセプションでも、数人の同級生と共に、ピアノをひきながら歌った。プログラムはすべて卒業する高校生によって運営され、その地域の公立学校の理事である牧師がメッセージを述べて、朗読する者、演奏する者など、静かな夜のひと時であった。卒業生の両親やきょうだいが、ほとんど普段着のまま集まり、体育館に用意されたコーヒーとクッキーで歓談し、先生や若い人たちも交って、笑いざざめく。市の郊外の小さなコミュニティの学校には、学校暴力は縁遠いようであった。

ミネアポリスは、樺の並木の美しい自然の豊かな町であった。しかし、ここにも都市化の波が押し寄せていることは明瞭であった。湖と教会の伽藍を中心としたダウンタウンの真上に高速自動車道が走り、そびえ立っていた

教会の塔はそのかげにかくれてしまった。商店街は舗石と天蓋でつなげられた。並木道を蔽う樺も、十五年程前に害虫のため多くが枯れ、植樹し直したとのことであった。そういえば、まだ若樹の並木道も各処に見られた。

大学のキャンパスも、近代的な建物が著しく増えて、カナダのエドモントンからくると、都会の窮屈なキャンパスのようにみえる。N氏の家は、湖の近くの最も閑静な地域だったが、空港が近くにできて、昼間は飛行機が屋根の上を頻繁にとび、ときに会話を中断せねばならぬくらいである。それにもかかわらず、異質な者を受け入れる理念を貫いて実践に移したこの社会は、精神的に成長しつつあるのではないだろうか。

(愛育養護学校)